

つがるの昔っこ (昔話) ③

嫁の願掛け

(標準語Ver.)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ

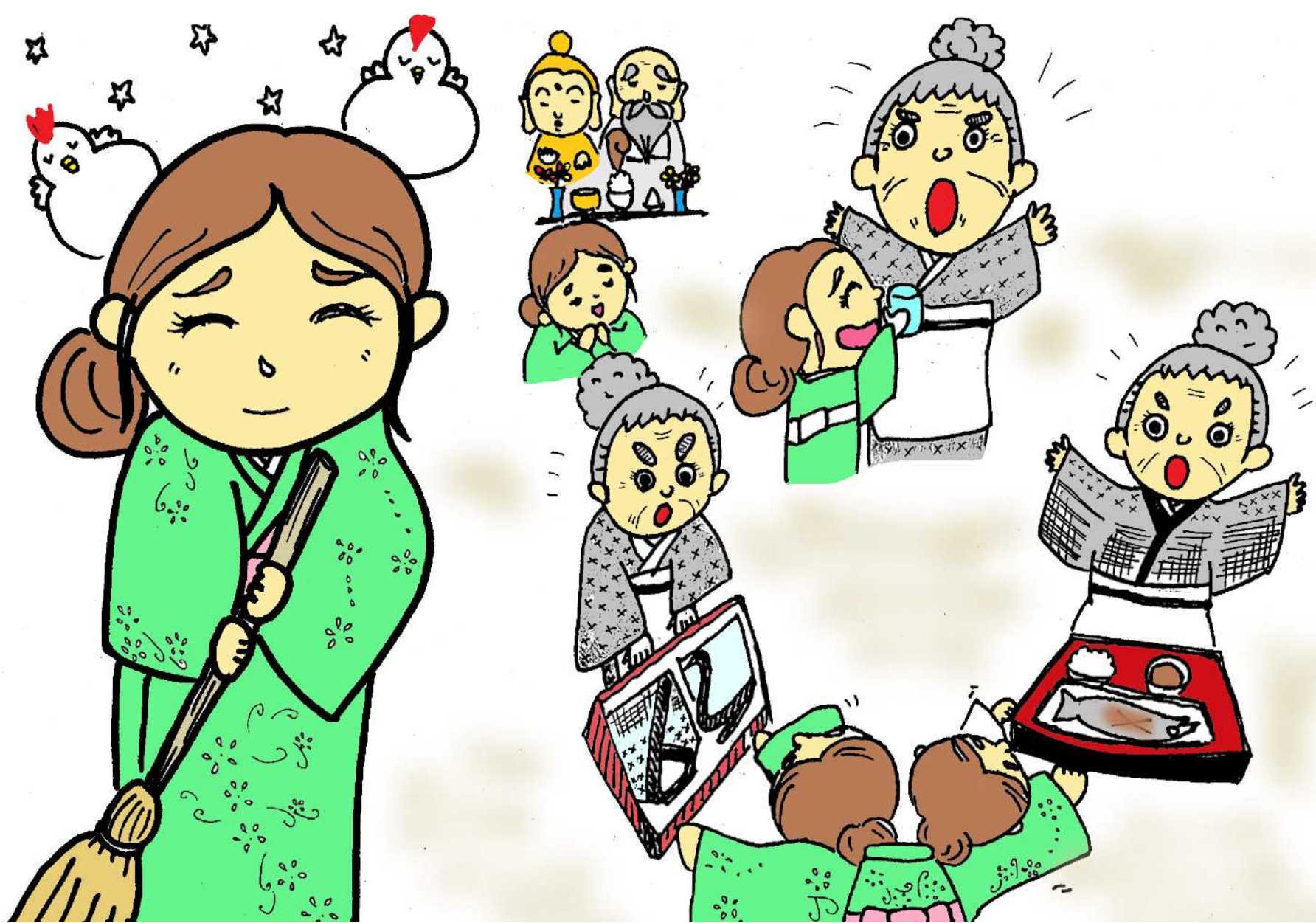
昔々、神さま・仏さまを熱心に信じているが、嫁に対しては何から何までつらく当たり、根性（あいしょう）の悪い婆さまがいました。朝早く起きて、神さまを拝んで、仏さまを拝んでいて、嫁が少しでも遅く起きれば村中に悪口を言いふらしていたそうです。仕事の仕方から、料理の味まで、また寝るところから起きるところまで、嫁のすることは何もかも気に入らず、今日はとなり、明日は向かいの家へと、嫁の悪口ばかりを話して歩き回る嫁いびりの婆さまでありました。嫁はそれがいやでいやで、我慢できなくなって、とうとう婆さまを殺してしまう気になりました。



ある日、お寺に行って和尚さまに、たまりにたまった胸にしまっていたことを全部話してしまってから、わたしの婆さまはこれほど根性の悪い嫁いびりだから早く死んでくれるように拝んでくださいと頼んだそうです。和尚さまは嫁の話をつんつんうんと、うなずきながらじっくり聞いていたら朝から晩までかかったということです。

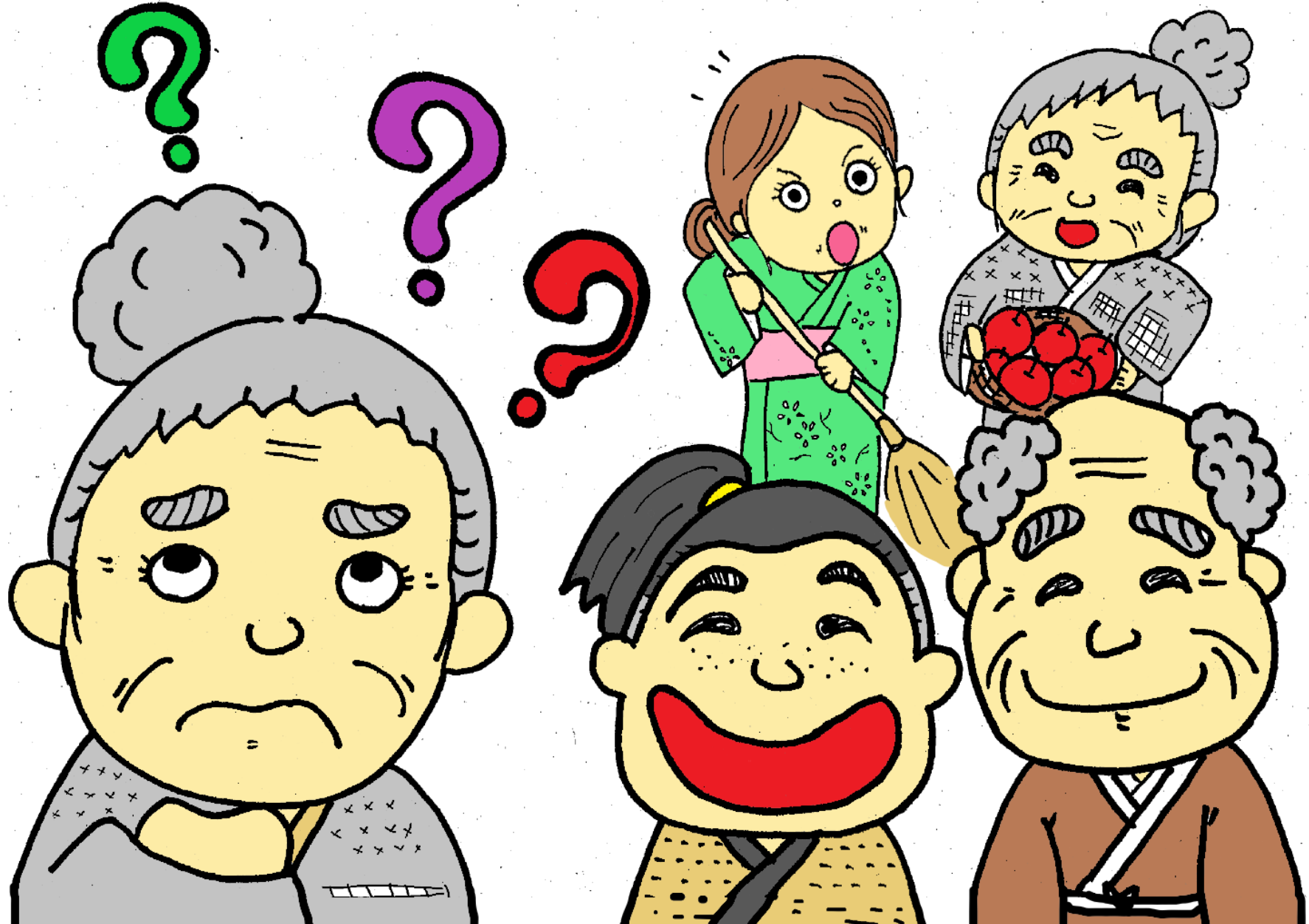


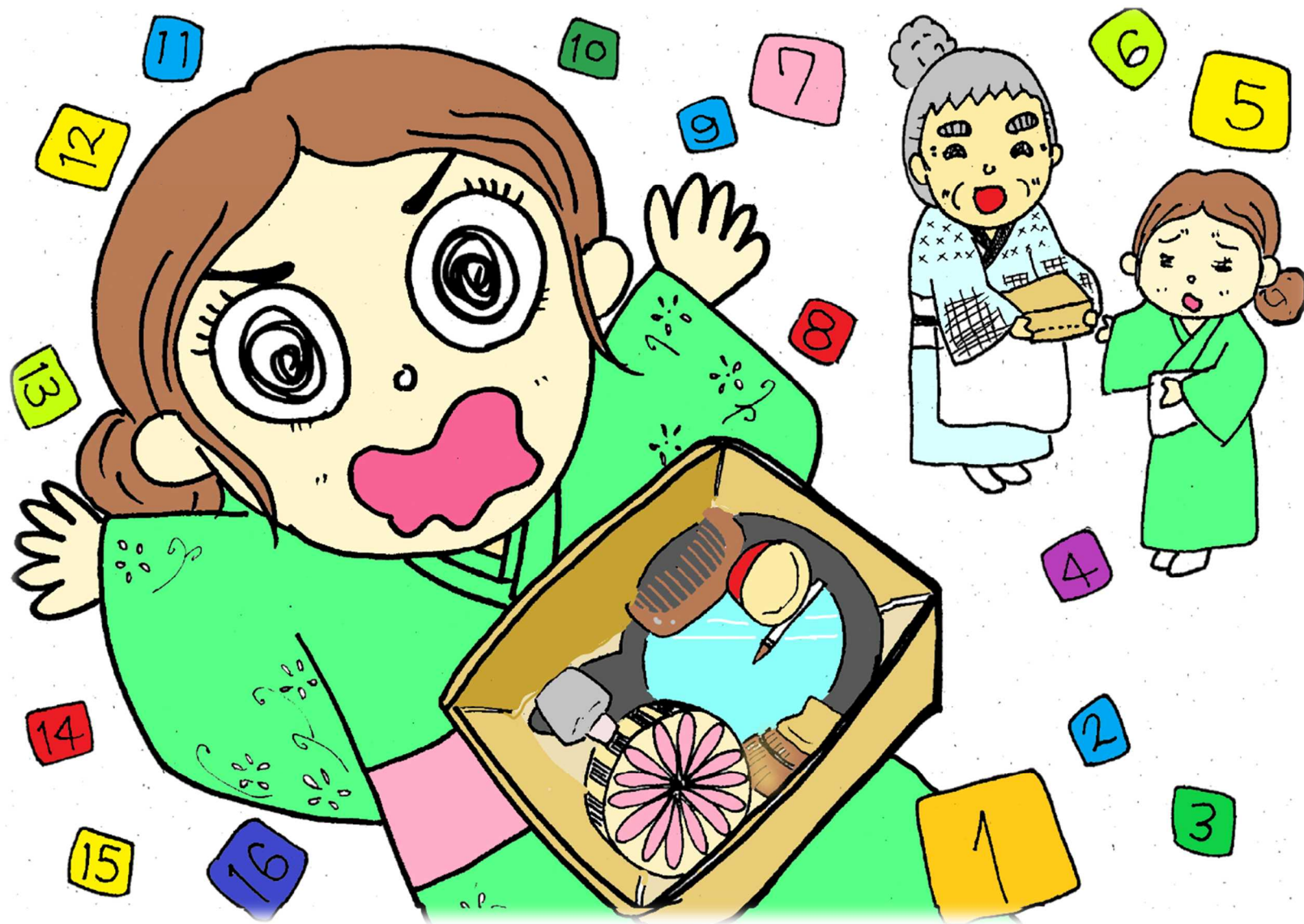
そこで嫁に「お前の話はよくわかった。三七（さんしち）二十一日の願掛けをすると婆さまは必ず死ぬ。それではこれからわたしの言うことを良く聞いて。その通り行わなければ婆さまは死なないよ。それから婆さまにお前の気持ちを見抜かれてしまったら婆さまは死なないよ。それではいいか、これからは婆さまより早く起きて掃除して、神さまと仏さまに水と花を供えて拝みなさい。婆さまは二十一日たてば死んでしまうのだから。これからはいい着物を着せてやり美味しいものを食べさせてやりなさい。たった二十一日我慢すればいいのだからな。あなたの自分の婆さまが死ねばいいという気持ちを見抜かれぬように。にこにこ笑いながら婆さまの世話をしやりなさいな。そうすれば二十一日の満願の日に婆さまはあの世へいくのだから。」と教えました。



さあ、嫁はたいそう喜んだそうだ。そして嫁は次の朝から一番鳥より早く起き出して、掃除もたいへん丁寧に行なって、神棚にも仏壇にも花を供えて、姑（しゅうと）が早く死ぬようと願掛けをして拜んだそうです。そして婆さまに「この着物はこんなに汚れてしまっているから、今度はこれを着てくださいな。」と新しい着物を着せてやったり「さあ、この魚おいしいから食べてくださいな。」「今日はまた暑くて。この冷たい水を飲んでくださいな。」とにこにこして世話をしていました。

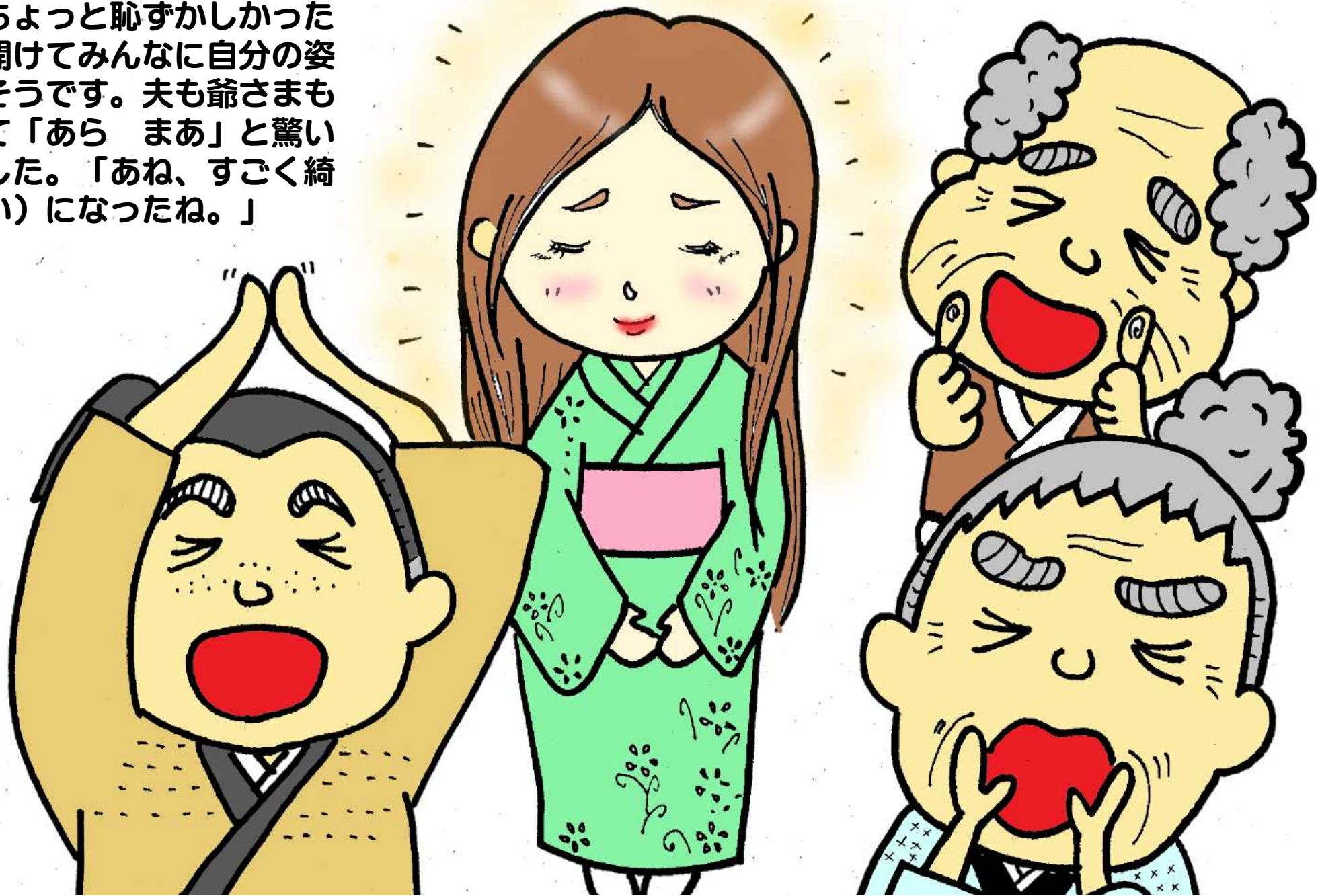
嫁がそのようにしていたから、婆さまも「家の嫁はどうしてこんなに良くなったんだろう」と不思議に思いましたが、悪い気にはしないもので、婆さまも「あね、あね」と声も優しくなりました。物も買ってやるようになりました。爺さまも夫も婆さまの愚痴（ぐち）を聞かなくても良くなって、嫁の仏頂面（ぶちょうづら）も見なくてよくなって、だんだんとみんな機嫌（きげん）がよくなって、家の中がみんな仲良くなって明るくなっていきました。





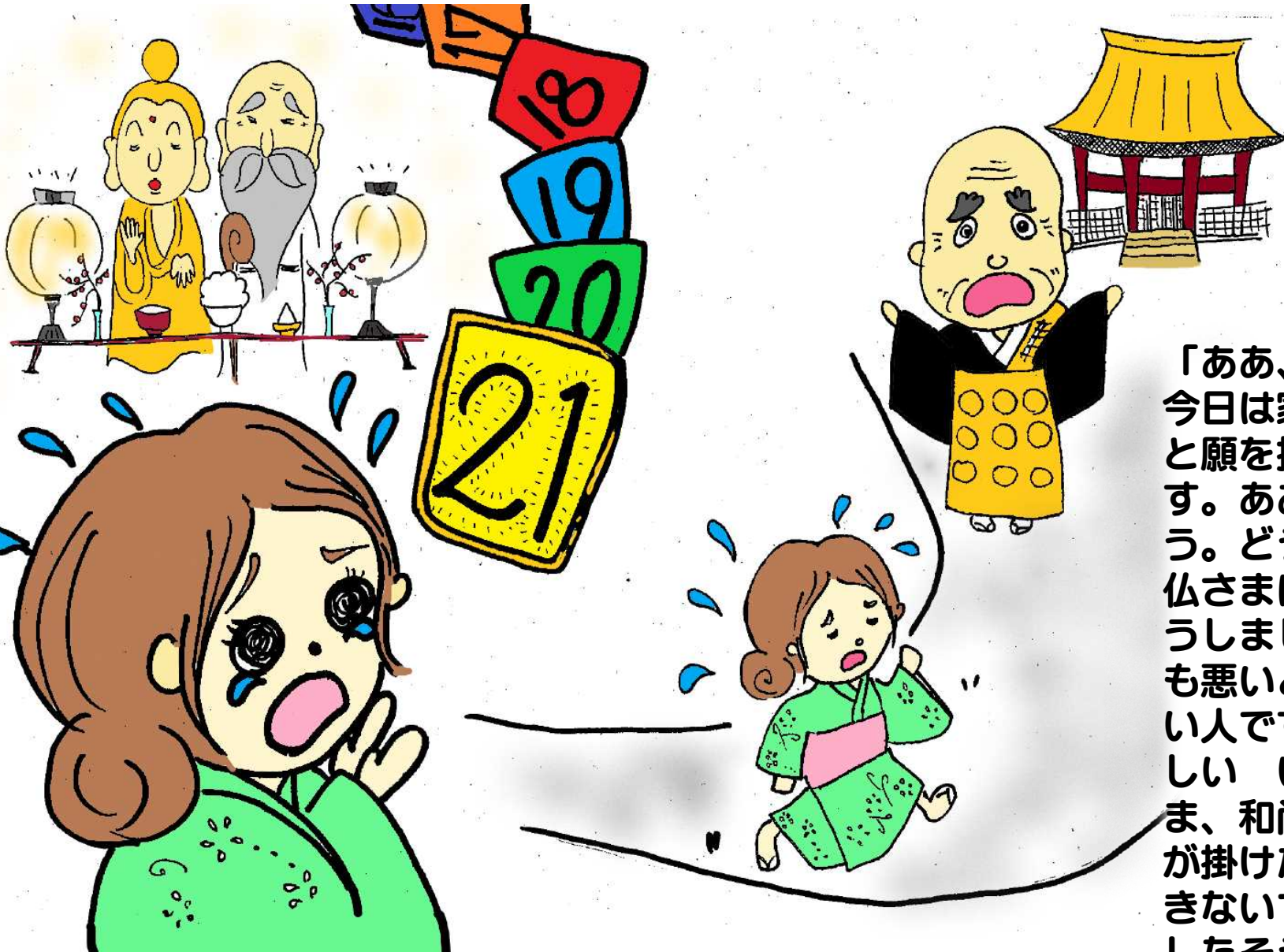
嫁が願掛けて十日が過ぎ、十五日が過ぎていきました。あるとき、婆さまが町に行って、何かの箱に入ったものを買ってきて「あね、あね、お前毎日よくやってくれるから、たまにはこんなものも使ってみないかい。」とって土産（みやげ）を嫁に渡しました。嫁は驚きましたが、早速寝床にいて箱を開けてみたところ、中から手鏡や櫛（くし）や髪油、おしろい、紅などが出てきたそうです。「あらまあ、私がこの家に嫁に来てから何年も紅やおしろいをつけたことがない。」嫁は、ドキドキしながら鏡をみて、髪に油をつけて、櫛で髪をといで、サジャラツ（少しだけ・さらっと）とおしろいをつけて、紅もつけたそうです。

嫁は、ちょっと恥ずかしかったけど戸を開けてみんなに自分の姿をみせたそうです。夫も爺さまもそれを見て「あら まあ」と驚いて喜びました。「あね、すごく綺麗（きれい）になったね。」



婆さまも「あらあら とても綺麗になってしまって。こんどは時々そうやって人前に出て、いろいろと出かけるといい。」と言いました。それを聞いた嫁は、目から涙がどっと流れ出て、ぼたぼたと流れ落ちたそうです。

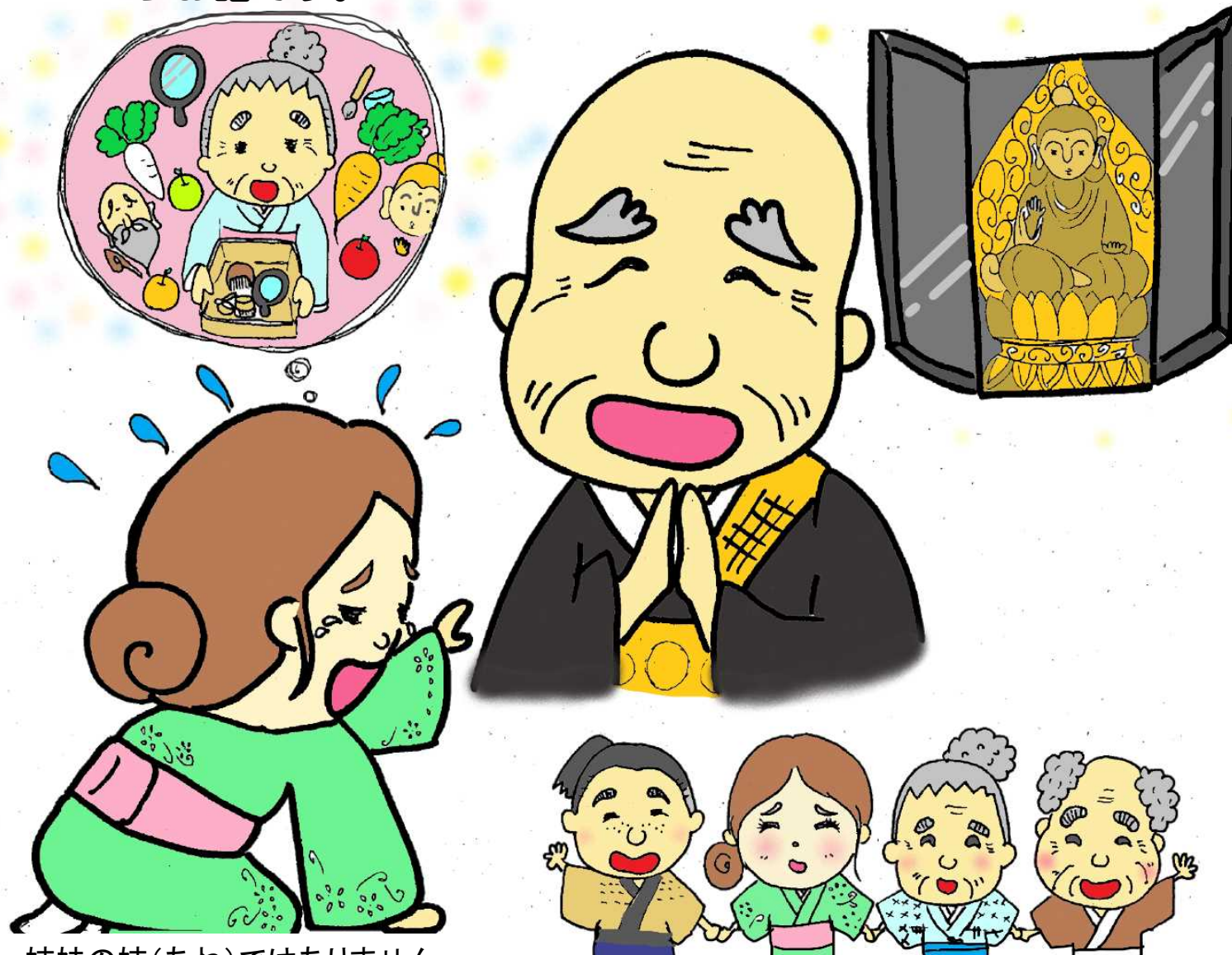
次の日の朝早く起き出して、神さま仏さまに明かりを灯して拝もうとした時に嫁はハッと気がつきました。「今日は二十一日、満願の日だ。婆さまが死んでしまう。」さあ、嫁の顔が真っ青になって、バタバタと寺へ走って行きました。息を切らしてお寺へ駆け込んで、大きな声で「和尚さま！和尚さま！」と呼んだそうです。和尚さまは、朝早くから何事かとびっくりして出てきて「あね、あね。いったいどうしたんだ？」



「ああ、和尚さま！和尚さま！今日は家の婆さまを殺してくれと願を掛けた満願の日であります。ああいったいどうしましょう。どうしましょう。婆さまが仏さまに殺されればいったいどうしましょう。家の婆さまは何も悪いところはないのです。良い人です。本当は心の奥のやさしい いい婆さまです。和尚さま、和尚さま、何とかして自分が掛けた願を掛け戻すことはできないでしょうか。」とお願いしたそうです。

和尚さまは、にこっと笑って「あららそうであったか、それほどいい婆さまだったら掛けた願を掛戻してやらなければならないな。」と言って嫁と一緒に本堂に行って、ありがたいお経（きょう）をあげて、嫁が掛けた願を掛戻してやりました。

それからというもの嫁と婆さまと仲が良くなったそうです。人というものは、相手の良くないところばかり見ていると良くないですよ、自分でも変わる気にならなければ人との付き合いはうまくいくものではないよというお話です。



* あね・・・長男の嫁のこと。姉妹の姉(あね)ではありません

おしまい